

# 慈雨と言え

玉井江吏香

【登場人物】

有馬 (同級生・元文芸部・地方公務員)

伊東 (同級生・元文芸部・新聞記者、現在静岡在)

漆原 (同級生・元文芸部・地域コミュニティ紙の編集)

●シーン 1

雨音。

舞台には背中合わせの3人の女性。それぞれがそれぞれの部屋等にいる。有馬、パソコンの前に先に座って画面を見ている。手元に原稿のよ  
うなものを持っている。伊東・漆原、時間を見たり、用事を済ませたり、飲み物の準備をしたりパソコンの状態や映りを確認したりしながら、  
時間を見てパソコンのチャットルーム(ZOOM的な)に入る。

有馬 あ、

伊東 有馬！

有馬 とうちゃん。おーー。

伊東 お。うるが、

有馬 うるちゃん、来た、かな。

漆原 おーー。あ、揃った？私最後？

有馬 うん。ええっと。

伊東 とりあえず、乾杯しよつか。

漆原・有馬 うん。

それぞれ、手にグラスやコップを持つ。

有馬・伊東・漆原、ひさしぶりー、とか、げんきー、とか口々に言いながら乾杯する。

漆原 ごめん、私遅かった？

有馬 全然。

伊東 いや私もうるのちよい前だったし。

有馬 時間通りだったよ、二人とも。全然。

一瞬間

有馬 元氣？

伊東 まあね。

漆原 まあなんとか。有馬は？近いのに、会ってないよねー。

有馬 はいまあ、手堅く。

伊東 おお、地方公務員。

有馬 とうちゃん、今、

伊東 静岡支局。

漆原 ガンダム。

伊東 それそれ。

有馬 お茶。みかん。

伊東 そうそう。

漆原 住みやすい？そっち雨どうよ？

伊東 結構降ってるよー、流石に日本中雨じゃない？今日は。そもそもここそっちに似てるし。あ、でも新人は2年で転勤するから、来年はまた別の地方局かなー。

漆原 へええ、大変ねー。うちはそういうのないから。

伊東 慣れあつたりしない方が、ってことかなあ、適度な距離を、的な。うるんところはあれでしょ、地域コミュニティ誌だから、寧ろ、

漆原 どんどん行く感じ。

伊東 って、うる、何食べてんの？

漆原 たこ焼き。

有馬 私もさつきから手の動き気になって、

伊東 焼いてんの？たこ。

漆原 焼いてる。

伊東 自由か。

漆原 便利なんだって、ひとりサイズのこの大きさ。今たこ焼きだけど、鉄板にすると一人焼肉とか焼きナスとか出来て。

有馬 ヘー。なるほど。

漆原 チジミも。

伊東 まあ確かに。便利かも。

漆原 でしょ。とうちゃん、何食べてんの？

伊東 私？コンビニで唐揚げとか、適当に。冷凍枝豆とか。有馬は。

有馬 私、割とちゃんと作ったよ。茄子のみそ和えとたたききゅうり。あと肉焼いた。

伊東・漆原 おおー。

伊東 肉いいね。

漆原 いいね。焼肉食べたい。

有馬 うるちゃんのたこ焼きの方が、

漆原 所詮炭水化物。

有馬 や、今出来上がるっていう臨場感が、

伊東 確かに。私も今度やる。

有馬 私も。

漆原 やってやって。

有馬 この間ね、

伊東 うん。

有馬 金子先生と岡平先生に会って。

伊東・漆原 （口々に）金子先生?! 岡平先生!

有馬 金子先生、二人目妊娠中で、産休って言ってた。

漆原 へえー。そっか、いいな学校の先生って、ちゃんと産休取れるよね。

伊東 まあ、ああいうところが率先して取ってくれないと、民間が取りにくいし。

有馬 うん。ほら、私たちの時も、金子先生途中で、

漆原 そうそう。それで岡ちゃん先生が代わりに担任になって。あれ二学期くらいだけ?

伊東 岡平・・・え、もう何歳? 元気だった? もう定年、

有馬 来年って。

伊東 まあそうよね・・・うわ、懐かしい。私らは特にほら、岡ちゃん、文芸部の顧問だったから。

漆原 懐かしいなー。私も会いに行ってみようかな、学校に。ちよ、たこ焼きめっちゃ美味しい。美味しくできた。

伊東 おおー。

有馬 めっちゃ美味しそう。うるちゃんって昔から、

漆原 ん?

有馬 そんな感じだったよね。

伊東 うん。自由人。

漆原、たこ焼きを食べる。

有馬 あかね、私、最近よく会うんだ、金子先生と。今年、移動した部署が金子先生の実家の居酒屋の近所で。

伊東 へえ、金子先生とこ居酒屋なんだ。

有馬 産休中だから、時々店にいるの。

漆原 へえ、行ってみたい。今度誘ってよ。

有馬 うん。

漆原 なんて店？

有馬 はせくら。

伊東 お、意外と高級そう。

有馬 お父さんの旧姓なんだって。

伊東 ああ。金子先生のお父さん、入り婿さんなんだ。

有馬 そうみたい。美味しいよ、そんなに高くないし。

漆原 待って待って、岡ちゃん先生、どこに登場するの？

有馬 常連みたいで。

伊東・漆原 ああ。

伊東 うん、それで。

有馬 うん。相変わらずふくふくしてて、

伊東 そうじゃなくて、

有馬 うん？

伊東 なにかあったんでしょ？

一瞬間

● シーン2

有馬 江崎のことなんだけど。

伊東 ・ ・ ・

漆原 ・ ・ ・

漆原 とうちゃん、お墓、行った？

伊東 ・ ・ ・ そっち、帰ってないから。

漆原 そっか ・ ・ ・ そうだよね。

伊東 うん。

有馬 これ、

と言つて、原稿用紙の束を見えるように、

有馬 本にならないかな？

漆原 なに？

有馬 江崎の、原稿。

漆原 え、

有馬 絶筆、っていうの？になると思う。

伊東 ・・・・なんで？・・・そんなに仲良かったっけ？

有馬 いや、なんていうか、

伊東 ・・・・

漆原 ・・・・

有馬 ・・・・えと、

伊東 「梅檀賞作家・江崎雨音、屋上から飛び降り自殺」の謎。

有馬 そんな言い方、

伊東 だってそうでしょう。

有馬 ・・・・

伊東 卒業したら音信不通になって作家になって。そしたら次の情報は、ニュースで「死んだ」って。

漆原 だって・・・まあ、江崎は才能があったから。

伊東 だからよ。

漆原 え、

伊東 だから腹が立つ。

漆原 え、

伊東 うるだって、有馬だって、みんな分かってたでしょ？江崎だけが・・・江崎だけに才能があった。

有馬 そんなことないよ、とうちゃんも、うるちゃんもすごかったよ、あの時期の文芸部は最強だったなーって岡平先生もおっしゃっ

てるし。とうちゃんは大手新聞記者で、うるちゃんだって地元だけどメディアで今でも書く仕事で、

漆原 や、うちは零細の地域コミュニティ雑誌だから。

有馬 でも誰でも出来る仕事じゃないでしょ。

伊東 中途半端にはあったから。文才が。

漆原 中途半端言うな。

伊東 ごめん・・・でも、江崎がいたから。

漆原 ・・・うん、まあ、

伊東 うん。

漆原 分かるけど。

少し間

伊東 「梅檀賞・江崎雨音」って聞いたとき、

有馬・漆原 ・・・

伊東 私ね、身が震えたの。

漆原 ・・・うん。

伊東 もうね、ほんとに。ぶるぶるって、ふるえたの。ああよかった、あの子には本当に誰にも負けない才能があったんだ。よかった、私だ

けじゃない、よかった・・・

有馬 とうちゃん、

伊東 なのに死んで。

漆原 酔っちゃったか。

伊東 自分で、死んで。絶筆の原稿ですつてなに。なんなのよ、いつまで……（少し笑う）いつまで私の情緒を破壊するつもりだーって  
いうか、ごめん、酔ってる。

漆原 （画面からビールを注ぐジェスチャー）まあまあ。

伊東 ……

漆原 私は、私たちは、かな（有馬を見る）、どっちかだと思ってたよ。もし将来、プロの作家になる人が居るとしたら、江崎かとうちゃんだ  
なつて。

有馬 うるちゃんだって、

漆原 私のは、面白いけど、文学ではない。

有馬 ……

漆原 文学じゃなくても、書く手段なんて何でもあるしね。

有馬 うん。

漆原 まあ、でも正直、とうちゃんの方がストイックっていうか、必死、っていうかごめん、夢中だったよね。江崎は、ほら、家がいちば  
ん、だったから、よく部活さぼってたし。水泳も。

伊東 今日は妹のピアノの練習日とか、お母さんの誕生日とか、

漆原 弟のマット運動教室の送り迎えとか、

伊東 そうそう。お父さんの昇進祝いつてもあった。

有馬 家の行事、多すぎたよね？

漆原 割といい家の子だったよね。転校してきたときも、なんかこう、「来た、美人転校生」って感じだったし。

伊東 勉強もできたし、いっつも楽しそうで。

有馬 うん。

漆原 だから余計、梅檀賞の、

伊東 「鋼の雨のごとく」

漆原 うん、義理の親から虐待受けてる女子高生の話・・・すごかった。こんなの書けるんだ、さすが江崎、天才、つてね。

伊東 そうそう、ふるえた訳ですよ、私の情緒がね。

漆原 飲んで飲んで。

有馬 ・・・

少し間

伊東 なんて、死んじゃったんだろ。

有馬、原稿を見ている。

漆原 で、それ、どうしたの、有馬。

伊東 あーごめん、私一人で語っちゃって、

有馬 ああ、うん、

伊東 お恥ずかしい。

漆原 まあまあ。

有馬 これね・・・女子高の文芸部の女の子たちの話。みんな普通に元気で、普通に毎日が流れて、何も起こらない。

伊東 ……

漆原 ……絶筆？

有馬 それもたぶんなんだけど。……江崎雨音の知り合いのものですつていう男の人から郵送で。「そちらにあるのがいちばんいいと思います。突然ですみません。迷惑でしたら燃やしてください。」って書いてあった。

伊東 紙で？データじゃなく？

有馬 うん。紙で。

伊東 出版して欲しい、とかじゃないんだ。

有馬 うん……でも。

漆原 なんで有馬なのかな？

有馬 江崎ね、よく、屋上にいたの、昼休み。私もよく屋上でご飯食べてたから。私がお弁当持ってくと、いつも江崎が先に来てた。雨でも寒い日でも、いつも。

伊東 ……

漆原 そか、ありちゃんと江崎のクラスだけ4階だったっけ？

有馬 うん……それもそうなんだけど。

#### 一瞬間

有馬 あの、

漆原 うん。

有馬 この間、「はせくら」に行ったら岡平先生が来てて。ちょうど、江崎のお墓参りの帰りだつて。金子先生もいて。

伊東　　そっか・・・今くらいだったか。

有馬　江崎の話になって。

伊東・漆原　うん。

有馬　この原稿のこともあったから。そしたら金子先生が、

伊東・有馬　・・・

有馬　家庭の問題があつて、親せきの家に引き取られた子でしょ、って。

伊東・有馬　・・・

有馬　引き取られた親せきの家の扱いにも問題が多かったって。

伊東　え、なにそれ？

漆原　江崎の話だよね？

有馬　私も、「江崎雨音ですよ、作家になった。誰かと間違えてませんか？」って言ったの。そしたら

伊東・漆原　・・・

有馬　間違える訳ない、って。「ちやうど産休入る前で、最後まで面倒見てあげられなかったこと、今でも胸が痛む」って。

伊東　そんな

有馬　「せっかく作家になったのに、自殺するなんてね。身体の傷は治っても、心の傷は治らないのね。辛かったでしょ、みんなも。」って。

そしたら岡平先生が、

漆原　ちよ待つて待つて。今の話のどこに岡ちゃん先生登場？

有馬　隠してたんだって岡平先生の指示で。岡平先生、学年主任だったから、先生の判断で生徒、私たちには。江崎が・・・隠したがってたから、

伊東　（遮って）え、ちよ、ちよ、ちよっと待つて。なに、その、えっと、からだの傷って。

漆原 あ、

有馬 江崎ね、小さい頃からの虐待で、身体中痣だらけだったんだって。だから水泳しないでいいように、金子先生たちが、

漆原 水が苦手で、日焼けが嫌いって、

伊東 ちよっと待って、

有馬 お昼もね、食べてなかったんだと思う。だからいつも私より早く・・・屋上に居た。

伊東 ちよっと待って。じゃあ、じゃあ、あの梅壇賞の「鋼の雨のごとく」、虐待されてる女子高生って、

漆原 ……江崎、

有馬（独白） 江崎雨音は、いつも、屋上のフェンスに寄り掛かって、後ろ姿で、私を待っていた。校舎の屋上へあがる階段は、最後のが7

段しかなくて、光が差すと西洋の教会の扉のように見えた。重い鉄の扉を開けると、雨音は、振り向いて笑った。

教室や部室での雨音は、怒ったりイラついたりしなかった。静かで、きれいで、朗らかだった。私は、屋上の雨音が好きだった。

「死んでもいいかなあ」が口癖の、江崎雨音が。

「だめに決まってるでしょ」私はいつも、死んではいけない理由を、雨音に語った。誰かに迷惑がかかる、とか、もうすぐテストだから、とか、みんな雨音が好きなんだよ、とか。理由は何でもよかった。雨音はその度に「そっか、じゃあそうする」と言って笑った。陽のさす日は光の中で、雨の日は扉の中の7段の階段で、益体もない、死んではいけない理由を、私たちは数えた。18歳だった。

漆原 雨、

有馬 あ、雨音止んだね。

伊東 うそ、こっちまだ降ってるよ・・・ああでも少し弱まったかも。そういえばそっち、水、大丈夫？  
漆原 今年は割といい感じで、

有馬 雨降ってるよね。多からず少なからず。

漆原 うん。ダム貯水量そんな低くない。

伊東 そっか。よかった。水不足はねえ・・・

漆原 江崎は喜んでたけどね。水不足で水泳なくなつて。

伊東 そうだっけ。

有馬 そう。

漆原 暑かったよねえ。あの年も。

有馬 うん。

漆原 「大地を潤し、草木を育てる。慈しみの雨だ。」

有馬 ……

伊東 ……なに急に。

漆原 や、よく岡ちゃん先生が言ってたな、って。

有馬 ああ、言ってた。

伊東 ……言ってたね。

漆原 大地を潤し、草木を育てる・・・何だっけ、この時期に降る雨の名前、  
伊東 慈雨。

漆原 それだ。

有馬 ああ。

伊東 「先生はいつも、君たちにとって『慈雨』でありたいと思っていた、君たちも、  
有馬 いつかどこかで、

有馬・伊東・漆原 誰かの慈雨であれかし、と願っている。」

伊東 言ってた言ってた。

漆原 言ってたね。

有馬 ……言ってた。

少し間

伊東 ……明日には止むんじゃない？雨。

有馬 うん。

伊東 ありちゃん。それ、私に送ってくれない？

有馬 うん、分かった。

伊東 読んだら、うるに回す。

漆原 待つてる。あー、できたらデータにしてほしいな。

伊東 ……まあ、やってみる。

漆原 泣くなよ。

伊東 泣くわ、こんなん。

有馬 普通の、高校生の話だよ。ほんと、何にも起こらない。泣いたり笑ったり喧嘩したり仲直りしたり。

伊東・漆原 ……

有馬 クリームパン食べたり文芸誌つくったり疑ったり嫉妬したり信じたり選んだり。江崎は、

漆原 こっちが本当。

有馬 ……

伊東 やめろー。どんだけ私の情緒攻撃してくるのよ、江崎ー。腹立つー。

漆原 そういふところよね。

有馬 江崎だもんね。

伊東 江崎ー。

漆原 江崎ー。

有馬 江崎ー。

伊東 ……ちよ、雨ひどくなってる？

有馬 雨も降らないと。

漆原 うん。じゃ、

伊東 あ、私明日出張で朝早いんだった。

有馬 え、

漆原 じゃまた。

有馬 また。

伊東 また。お休み。

三人、ログアウト。

部屋の外では、まだ雨が降っている。細く細く。

雨音がいつか学校の放課後の騒音となり、よくある、授業終りのチャイムが鳴る。

おしまい